
SDGs から考える動物福祉

～人間とペットとの共生～

第1章 はじめに

1-1. プロジェクト名

SDGs から考える動物福祉
～人間とペットとの共生～

1-2. 背景および問題意識

ペットは家族の一員として認識されており、身近な動物となっている。ペットの中でも犬に注目すると、2020年の新規飼育者は2019年と比べて増加し、また増加率もそれ以前の年に比べて大きくなっている。コロナ禍で自宅にいる時間が増えたことが犬と暮らすきっかけになったと推察される。

しかし、無責任な飼育は後を絶たない。第一に、ペットの病気や加齢などを理由に手放す場合がある。医療費や食費の経済的なコストに加え、世話の手間が増して手に負えなくなる、可愛い時期を過ぎて飽きるという背景が考えられる。第二に、家族構成や住環境の変化を理由に飼育が困難になり手放す場合がある。

また、繁殖・販売の段階においても、人間の都合を優先した悪徳業者の問題が報道されることは少なくない。狭く不潔な環境で、母体の負担を顧みず何度も出産させたり、高額な生体販売が行われている日本のペット業界は、命を“消費する”側面もあるのではないだろうか。

現在、あらゆる国、機関、団体がSDGsに取り組んでいる。SDGsとは、持続可能な社会の実現に向けた目標であり、動物に関する内容も含まれる。例えば「陸の豊かさを守ろう」では、生物多様性の保全をテーマに取り組まれている。しかし、人間の最も近くで暮らしているはずのペット動物に関しては、その持続可能性について明確な記述がない。日本動物福祉協会が定義する「動物が精神的・肉体的に充

分健康で、幸福であり、環境とも調和していること」という動物福祉の視点は見落とされているのではないだろうか。

日本動物福祉協会によると「動物の基本的ニーズ（生理的、環境的、行動的、心理的、社会的）」を「飼育下あるいは人間によって制限された環境にいる動物たち」自身で満たすことはできないという。したがって「人間にはそのような動物ができる限り快適に、できる限り苦痛をうけずに生活できるようにする義務と責任」がある。そこで本プロジェクトでは、ペットの動物福祉に焦点をあて、SDGsの「つくる責任 つかう責任」と関連づけて考える。

1-3. 目的

SDGsの「つくる責任 つかう責任」と関連づけて、繁殖、販売、飼育、訓練、保護、供養等にかかわる人にインタビュー調査を行い、人間とペット動物との共生について考える。

1-4. 代表者および構成員

- ・代表者
山田 桃子 家政教育専修 1回生
- ・構成員
岩尾 勇輝 家庭領域専攻 4回生
田中 乃理子 家庭領域専攻 4回生
藤原 若葉 家庭領域専攻 4回生

1-5. 助言教員

杉井 潤子 先生（家政科）

第2章 調査の内容および実施経過

2-1. 方法

本調査では、SDGsの1つ「つくる責任 つかう責任」と関連付けて、繁殖、販売、飼育、訓練、保護、供養等に関わる職業の方々に、「動物が幸せに暮らすために、動物に関わる方がどういう思いでいるか」に関する半構造化インタビューを行う。本調査の期間は、2021年11月17日から11月28日の12日間で、1時間ほどインタビューを行った。

インタビュー候補者は、プロジェクトメンバーで話し合い、計10名を抽出した。10名に連絡を行い、

了承をいただいた4名の方にインタビューを行った。

表1

名前	対応状況	インタビュー方法
①京都動物愛護センター	2021年11月に電話連絡を行い、2021年11月21日9時から約1時間半のインタビューと施設見学を行った。	施設に訪問してインタビューを行った。施設内の見学もさせていただいた。
②セカンドチャンス京都	2021年11月に2度メール連絡を行ったが、返信を頂くことが出来なかった。	
③京都警察訓練所	2021年11月に電話連絡を行ったが、対面でのインタビューは了承していただけなかった。	
④英国ラブラドルプリーダートラッカーハウス長岡京ドッグスクール	2021年11月に電話連絡を行ったが、多忙で手が離せないとのことで、代表者の方にお話をする機会が頂けなかった。	
⑤関西動物霊園	2021年11月に電話連絡を行い、2021年11月20日17時から約1時間のインタビューを行った。	施設に訪問してインタビューを行った。
⑥京都ポニー動物園	2021年11月に電話連絡を行ったが、繁忙期のシーズンのため時間が合わず了承していただけなかった。	
⑦嵐山モンキーパーク いわたやま	2021年11月に電話連絡を行ったが、繁忙期のシーズンのため時間が合わず了承していただけなかった。	
⑧保護犬のいるドッグカフェゼロ	2021年11月に電話連絡を行い、2021年11月17日12時からインタビューを行った。	施設に訪問してインタビューを行った。

⑨THISPHOTO 方	2021年11月にInstagramのダイレクトメッセージにて連絡を行い、2021年11月28日19時からインタビューを行った。	Zoomにてインタビュー調査を行った。
⑩姫路セントラルパーク	2021年11月に電話連絡を行ったが、繁忙期のシーズンのため時間が合わず了承していただけなかった。	

2-2. 京都動物愛護センター

(1) 取組の概要

京都市と京都府の共同設置、共同運営により、動物愛護の普及啓発などに取り組む機関。主な役割は

- ①犬猫の保護
- ②負傷動物の保護
- ③収容された犬猫の管理・治療・譲渡
- ④犬猫の飼い方等の相談
- ⑤犬猫の飼い主への返還
- ⑥人を咬んだ犬の狂犬病検診
- ⑦動物取扱業と特定動物の審査・指導
- ⑧まちなねこの避妊去勢手術

(2) 目的

京都市および京都府が実施している動物愛護の取組について理解を深める。また、保護・管理・治療・譲渡を担当する職員（獣医師：白井孝拓さん）から、ペットの動物福祉に対する思いを聞きとる。

(3) 調査方法

i) 日時

2021年11月21日 日曜日 9時～10時半

ii) 方法

京都動物愛護センターを訪問し、インタビューおよび犬舎・猫舎の見学

(京都府京都市南区上鳥羽仏現寺町11)

(4) インタビュー内容

①京都動物愛護センターの業務は、動物愛護に関して何を担うのか。

職員は、獣医師、飼育員、ボランティア。公務員であり、法律の範囲内で犬猫を保護する。元々ペットとして飼育されていた犬が多く、高齢の飼い主から引き取りを求められたら応じる。職員の人数が少なく、受け入れ頭数も限られる。また、野犬や繋留されていない犬は狂犬病の検査をして引き取る。攻撃性の高い犬もいるため、ドッグトレーナーがしつけや癖を見て、人と「共生」できるか評価し、安楽処分か譲渡対象となるかを判断する。

②人と「共生」とはどのような状態を指すか。

飼い主も動物も幸せになること。幸せであること。そのために、センターとして譲渡する際には、マッチングとその後のケアに関する責任がある。アフターフォローとしては、2週間に1回程度問題がないか聞き、アドバイス、説明を行う。譲渡しておしまいではない。

③譲渡希望者とのやり取りで気をつけていること。

犬を飼育した経験がある人ほど、これまで飼育した犬（例えばトイプードルなど、人なつっこい性格の犬）とのギャップを感じやすいので丁寧な説明を行う。野犬は先祖も野犬であり、本来人と暮らす動物ではない。警戒心が極めて強い系統であり、遺伝子的なバックグラウンドから、おなかを見せて撫でて欲しいようなポーズを見せることは生涯ないと考えられる。「慣れたらあの子（トイプードル）のようになるだろう」と期待しない方がよい。

④仕事をしていて、喜びを感じる時はあるか。

譲渡されたときはうれしい。SNSやチラシをきっかけに希望者が足を運んでくれるなど、数字にコミットできたときは喜びを感じる。

⑤大変だと感じる時はあるか。

野犬を追い込むときは大変。30人で追い込む。大変だが「今サボったら運命変わる」という思いで頑張っている。追い込む方法はやりたくはないが、やっぴいかなければならない。犬や猫を地域に放っておくことは、蛇口から水があふれ続けているような状態。元栓をひねって、そもそも施設に入ってくる

数を少なくしたい。

⑥人間の責任について、思うこと。

「簡単に飼ってしまう」ことがやはり多いことが問題。どうしても飼育し続けることができない場合は、公務員なので法律に基づいて引き取るが「お金がない」などの理由では受け付けない。「野に放たれるよりはマシ」という思い。

センターとしては、とにかく「入ってくる数を少なく」がミッション。野良猫にエサをやってはいけないという法律はないため、止めることはできないが、避妊や去勢手術に地道に取り組むことで産めなくする。

(5) まとめ

「殺処分は可哀想」という感覚はきっと多くの人々の間で共有されている。本プロジェクトが始まったきっかけも、殺処分がなくなる現状への疑問だった。しかし、感情論で解決する問題ではない。法律に基づいて、少しでも不幸な犬猫が減るように地道に活動されている。

インタビューと施設内の展示・配布物から、一貫して「入ってくる数を減らす」という目的が伝わった。すでに関心があつて足を運んだ人には、直接的、間接的に「自分にできること」がわかるよう案内された。例えば、保護犬・保護猫から迎え入れるという選択肢をもつ、「しっかりとルールを決めて地域で世話することで、野良猫に一代限りの命を全うさせながら、野良猫の数を減らしていく」活動（まちねこ活動）への参加、動物愛護事業推進基金への寄付等がある。

これら京都動物愛護センターの働きかけはSDGs「つくる責任 つかう責任」だけでなく「すべての人に健康と福祉を」「パートナーシップで目標を達成しよう」とも結びつくのではないだろうか。犬猫がその生涯を幸せに全うするためには、飼い主が最後まで責任をもって世話をすることが第一である。ただ、それだけでなく、当事者意識をもってかかわる人口を増やしていくことから始まるのだということを、京都動物愛護センターの訪問を通して考えた。

2-3. 保護犬のいるドッグカフェゼロ

(1) 取組の概要

保護犬の譲渡を行うドッグカフェ。併設されたサロンでトリミングも行っており、気軽に犬とふれあうことを目的としている。

(2) 目的

ペットショップでは生体販売が行われ、そのために見た目の良い犬や人気の高い犬が次々に生まれている。一方で捨てられて野犬になってしまった犬や、多頭飼育崩壊によって保護された犬、また繁殖犬を引退した犬など、引き取り手が見つからず処分されてしまう犬も多くいる。

そこで今回の調査は、民間が経営する保護犬の譲渡施設である「保護犬のいるドッグカフェゼロ」へ伺い、保護犬を取り巻く現状についてどのように考えているのかインタビューを行った。

(3) 調査方法

i) 日時

2021年11月17日水曜日 12時～12時半

ii) 方法

保護犬のいるドッグカフェゼロを訪問しインタビュー

(大阪府枚方市長尾家具町2丁目15-2 家具町ハイツ105)

(4) インタビュー内容

①なぜ保護犬カフェなのか。

保護犬だけを扱う店や施設は気軽に行きにくく、保護犬を飼うことを視野に入れた人しか集まらないことになってしまう。保護犬と出会うチャンスを少しでも増やそうとするねらいがある。また、ペット同伴可能でトリミングも行っているため、犬同士の出会いの場を作っている。これらは保護犬を一頭でも多く助けたいという気持ちからきている。

②どういう経歴の犬を扱っているのか。

多くは繁殖犬を引退した犬である。年齢を重ねた雌の繁殖犬をブリーダーから引取り、譲渡する活動を行っている。

③どういう思いを持って経営しているのか。

一頭でも多くの保護犬を助けたいという思いから、多くの人に知ってもらうことを目指している。そのため、犬を飼うつもりのない人や保護犬について知らない人でも入りやすいような店にすることを目指している。話している内に譲渡が決まるなどの事例もあり、人と保護犬を気軽に繋ぐことができる店でありたい。開店から1年目はかなりのペースで、2年目は新型コロナウイルス感染症の流行もありペースは落ちてしまったが、2年間で60頭の譲渡を行っている。

④客層について。

基本的に、ある程度の年齢の子ども+40～50代の夫婦という家族や、子育ての落ち着いた夫婦へ譲渡活動を行っている。高齢者のみの家庭や、小さな子どもがいる家庭には譲渡をお断りすることもある。譲渡された犬が最後に寿命を迎えるまで、安心して過ごすことができるようにと考えてのこと。10年も責任を持って犬を飼っている状況が見える家族形態であることを重視しているので、条件は厳しめ。

⑤経営にあたっての責任について。

同時にカフェにいる保護犬は最大3頭という決まりを作っている。今のところ引き取った犬全員を譲渡しているが、病気等で引き取り先が見つからない場合に責任を持って飼えるギリギリの頭数が3頭。

⑥ペットショップ（生体販売）についてどのように考えているのか。

特に存在を否定する気持ちはない。世界が変わらなければペットショップがなくなるなんてことは起こらないのではないかと考えている。それならばまず保護犬や、処分されてしまう犬の存在について皆が知ることの方が大切だと考えている。ペットショップが悪いとか、ブリーダーが悪いとかではなくて、皆が犬を取り巻く現状を知っていくことの方が重要。

(5) まとめ

「保護犬のいるドッグカフェゼロ」では保護犬

の里親になるという選択肢を広めることの大切さについて学んだ。問題関心をもっている人々による保護犬の認知・譲渡は進んでいる。今後は、より幅広い人が保護犬から迎え入れるという選択肢を持てるよう、情報を発信していくことが必要だと考える。

2-4. THISPHOTO (フォトグラファー)

(1) 取組の概要

写真の力で犬や猫の殺処分を減らすための活動を行なっている団体。「ぼくらは幸せになるために生まれてきた」という写真展、InstagramなどのSNSを用いて発信を行なっている。

(2) 目的

殺処分をなくすことを目標に掲げ、Instagramなどのメディアを通じて保護犬の現状について発信している方へ、現状や問題点をどのように考えているか問う。

(3) 調査方法

i) 日時

2021年11月28日 日曜日 19時～20時

ii) 方法

Zoomを用いたオンラインでのインタビュー

(4) インタビュー内容

①活動を始めたきっかけは何か。

もともとは普通にペットの撮影をしていた。社長が15年ぐらい前にセンターに写真を撮っていたという話を聞き、施設を見に行っただのが最初。何かできることはないかと考えたところ、私には写真しか力になれることはないと思ったのがきっかけ。

②活動で目標としていることは何か。

最大の目標は殺処分をなくすこと。

③写真を撮るときに何を考えているか。どのような表情で撮りたいか。

施設にいる子と、ペットとして飼われている両極端な子を撮る。施設の子の時は「どうやったら伝わるかな」と考えつつ、会話しながら撮る。ありのまま

の自然な表情を撮れるように。幸せな子を撮るときは普通に「かわいいねかわいいね」という感じで撮る。

④作品をどのような人に見てもらいたいのか。

(殺処分に関する現状を) 全く知らない人もいれば、見たくなくて知らないふりをしている人もいる。私の作品はいきなり目を背けたいほどのものにはしていない。知らない人がぎりぎり入り口に立てるくらいの写真を撮りたいと思っている。一番は「知らない人が知るきっかけとなるような写真を撮れば」と思っている。

⑤活動が伝わったと感じるときはどんな時か。

前回の写真展で、もともと目標を1000人に設定していたところを、1730人くらいの人に見に来てもらえたことは自信になった。「知らない人の入り口になりたい」という理念を掲げていて、実際に来てくれた人が「今まで知らなかったけど、知るきっかけになりました」と言ってくれたことはとても嬉しかった。

⑥動物にとっての幸せとは何だと思うか。

動物に聞いてみないと分からない。果たして人間と一緒にいて幸せなのかということもある。人間も動物と同じと考えると「愛されること」が幸せなのではないか。

⑦若い世代にどういうことを望むか。どのような意識を持ってほしいか。

年齢の関係はないけれど、どこで迎えた命だとしても、最後まで責任をもって一緒にいることが一番。そういう当たり前のことを小学生などの小さいころから教えてあげられれば悲しいことも減ると思う。

⑧老犬、老猫の撮影はどのような意図をもって行われているのか。

(保護犬の) 譲渡率が下がり、体力などの問題で殺処分される割合が高いが、(ペットの子は) 動物と飼い主との絆を強く感じられ、時間がたつごとに愛情が増すことを知ってもらいたい。逆に、衰えてい

る姿も映すことで、飼いはじめでは思いつかないような現実を見せることができると考えた。

⑨今後の展望はあるか。

来年東京で行う写真展が一つの目標。また、各施設の保護犬、保護猫の写真をまとめてみることでできるようなウェブサイトを作りたい。今までのポスターなどよりも魅力的に撮りたい。普段からもっと気軽に写真を見てほしい。

(5) まとめ

「THISPHOTO」では、ペットに関心のある人が将来の見通しに対して考えるきっかけづくり、また、そもそも関心がない人に知ってもらうためのアプローチを行なっていることがわかった。ペットという存在の様々な側面について、その情報を伝えていくということが、一人ひとりのペットを大切にしようとする意識につながるのではないかと考える。

2-5. 関西動物霊園

(1) 取組の概要

関西動物霊園は、家族の一員として昼も夜も共に過ごしたペットの葬儀、火葬、納骨を行っている。

(2) 目的

現代では、動物をただのペットとして飼うのではなく、家族として一緒に暮らすように、人と動物の生活様式に変化がみられるようになった。これは、共に過ごしてきた動物を供養するようになったという点からも分かることである。そのため、日々の生活を家族としてともに過ごしてきた人々は、動物の最後をどのように迎えているのか「家族として供養する」という点に目を向け、動物の供養に関わる人々がどのような思いでいるのか伺うため、関西動物霊園の方へのインタビューを行った。

(3) 調査方法

i)日時

2021年11月20日土曜日 17時～18時

ii)方法

関西動物霊園を訪問しインタビュー

(京都府京都市南区久世上久世町 358-1)

(4) インタビュー内容

①動物霊園を始めたきっかけは何か。

関西動物霊園は創業40年で、京都では最初の発祥である。人様と動物が一緒のお墓やお寺にというのはご法度の時期に、知り合いのご住職の「ペットにもご供養を」という教えから先代により創業。創業当時はとても珍しい業種であったことから、テレビや新聞の取材対応に追われることもあった。その後、先代の他界等様々なことをきっかけに、関西動物霊園を継ぐことに決めた。

②どのような気持ちで取り組んでいるのか。

ペットちゃんの最後をお見送りするところ。家族として一緒に過ごしてきたペットちゃん達のお見送りをお手伝いするという立場で、少しでも家族様の気持ちに寄り添うことが出来ればと思いをもち、日々立ち合いをさせていただいている。最後まで家族として一緒に過ごしてきたのであれば、亡くなってから他の人が家に来た時に気を遣って骨壺を隠すというのは、動物にとっても、家族にとっても悲しい。自然体に、家の一部として残すことができるような骨壺作りにも取り組んでいる。

③ペットの葬儀はどのように行われているのか。

人と同じ葬儀。御家族様でお見送りをして、お骨上げをして、お骨と一緒にご自宅に帰ることが基本。葬儀のタイミングは「別れが寂しい」など、心が落ち着かれるまで、2～3日は一緒におられる場合があれば「今すぐにでも火葬してほしい」と言われる場合もある。

④どのような客（飼い主）が多いか。

年齢層はお年寄りから小学生。今までは高齢者の割合が多かったが、動物を飼うことが年齢的にもしんどくなってきたことや、自分よりもペットが長生きした時に、残されたことを考えたら可哀想なので飼わなくなったことなどから、高齢者の飼い主から依頼される数は少しずつ減少している。最近では、若い飼い主によるペットの葬儀が増えつつある。多

い場合 100 回以上葬儀対応。回数が多いのは猫の飼い主。

⑤印象的な飼い主はいたか。

人と同様に、家族としてお別れを悲しむ姿を始めて拝見した時は、今まで思っていた動物に対する考え方が変えられた。ほとんどの方は、「ペット＝家族」としてのお別れが多い。反対に、亡くなったことにも気づかないような「物？」と思わされる機会もあり悲しい気持ちになることもあった。

⑥「動物が幸せに死ぬ」とはどのように考えるか。

「病気や事故で死を迎えるのではなく、寿命を全うすること」も幸せに死ぬことだと思うが、それ以上に、そのペットちゃんに「どれだけ楽しい思い出を残してあげることができるか」だと思う。看取ることが出来ないとしても、それまでの間に記憶に残るようなことをたくさんしてあげることが重要。もちろん、ほめ続けるのではなく、親身になってしつけをすることも大切で、どれだけペットちゃんに接するかが重要。

(5) まとめ

家族として共に人生を過ごしてきた動物の最後についてのお話を聞くことが出来た。泣きじゃくってご遺体から離れられないお客様もいれば、亡くなっている事にも気づかないお客様もいるという話が特に印象的であった。また、山本さんは、コロナ禍によるペットブームについても言及された。葬儀社に供養してもらえるペットたちだけではなく、捨てられてしまうペット達への不安もあるという。動物と共に過ごすためにはどのくらいのお金がかかり、どのような生活の変化があるのかといった死まで見据えた命の重みを感じ、知ることが必要不可欠であると考えている。

第3章 結論

保護犬や犬猫の殺処分を中心にインタビューを行ってきたが、共通していたことは保護犬が存在することや殺処分が行われている現状を知ってもらうことが重要であるということだ。ペットを飼ったこと

がない人は遠い世界の話のように感じていること、実際にペットを飼っている人でも関心を持っていない人が多い。まずこれらの現状に関心を持つこと、そして主体となって考えること、そこから間接的もしくは直接的に問題に関わっていく人を増やしていかなければならない。

そこで学校での動物飼育に目を向ける。インタビューの中では「どこで迎えた命だとしても、最後まで責任をもって一緒にいることが一番。そういう当たり前のことを小学生などの小さいころから教えてあげられれば悲しいことも減ると思う。」という言葉があったが、学校で動物飼育を行うことで、飼育の大変さを経験しながら動物に親しむ経験を得ることができると考えた。管理費用、長期休暇にはどうするか等の課題も多いが、動物に親しみ、慈しむ心を育成する機会になるだろう。

本調査を通して、あらゆる家庭で家族として存在するペットについて、知らないことが非常に多いと痛感した。知らないから現状が許されるのではなく、自分たちから知ろうとしていくことが大切だと感じた。殺処分や保護犬の現状を知った今、私たちがより多くの人に知ってもらえるように活動することが必要だろう。

第4章 会計報告

予算配分	100,000 円
支出総額	24,116 円
残額	75,884 円

支出の内訳

①交通費 4,840 円

保護犬のいるドッグカフェゼロ	$(310+230)*2*2=2,160$
関西動物霊園	$160*2*2=640$
動物愛護センター	$(190+160)*2*2+160*2*2=2,040$

②消耗品・書籍 13,731 円

ボールペン (赤)	サラサクリップ	$75*5=375$
ボールペン (黒)	サラサクリップ	$75*5=375$

USB メモリ	エレコム USB メモリ 16GB	1,042*2=2,084
フラットファイル	アスクル フラット ファイル A4 タテ 10冊パック	249
書籍	アダム・ミクロン『犬 の動物行動学:行動・ 進化・認知』東海大学 出版部 (2014)	4,180
書籍	ジョン・ブラッドシ ョー『犬はあなたを こう見ている:最新 の動物行動学でわか る犬の心理』河出文 庫 (2016)	1,078
書籍	ブディアンスキー, スティーブン『犬の 科学:ほんとうの性 格・行動・歴史を知 る』築地書館 (2004)	2,640
書籍	アレクサンドラ・ホ ロウィッツ『犬から 見た世界—その目で 耳で鼻で感じている こと』白揚社 (2012)	2,750

<参考・引用文献>

布川 2020年12月16日「意外と知らない「動物のくらし」と「SDGs」の関係性」

https://blog.losszero.jp/blogpost/news_0449/ (最終閲覧日 2022年1月4日)

田中晴基、イ・ナヨン 2020年12月 「SDGs時代におけるペット動物との共生社会像 CSV視点でビジネスモデルを再定義する(前編)」

<https://www2.deloitte.com/jp/ja/blog/d-nnovation-perspectives/2020/symbiosis-with-pet-animals.html> (最終閲覧日 2022年1月4日)

環境省 「統計資料「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」【動物の愛護と適切な管理】」

http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html (最終閲覧日 2022年1月4日)

友森玲子 2019年3月15日 「膨大な負担も…動物ボランティア「命を選ばなければならない悲しみ」」

<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/63386> (最終閲覧日 2022年1月4日)

③印刷費 5,545 円

インクタンク	5,203
コピー用紙	342